

21世紀初めに「恒産なければ恒心なし」をおもう

学長 高橋 孝助

19世紀後半の中国近代のある時期に「贖田（しょくでん）」が主張され、これを実現しようという動きがあった。「贖田」とは、災害によって窮迫した田畑の所有者がやむを得ず二束三文で田畑を売却し一層飢餓の極に陥っている状況を救済しようとする策であった。つまり「贖田」とは田畑を一定の条件のもとで買い戻す策であり、嫌がる所有者に対し「贖田」を認めさせる、その許可を地方大官に求めるものであった。田畑こそが、一般民衆（農民）が家族を養い、生活を安穩に送ることができる「富の基本形態」なのであり、農本抑末（商）思想にも通ずる考え方である。災害が回復して生産が再開されても田畑を売却してしまった農民には耕作すべき田畑はなく、飢寒こもごも迫り、難民化すらしかねないほど貧困に陥り、社会不安を惹起するといっているのである。こうして「恒産なければ恒心なし。飢饉の年は盗賊の媒介をなし、失業は飢えと寒さの原因である」、「大飢饉の後、国計（国家戦略）は、貧しさを抑えるものでなければ安定することはなく、貧しさは破格の前例を破るような方法でなければ、国家の緊急事態を救うことはできない」などの文脈で「恒産」「恒心」が登場する。

周知のように、この「恒産恒心」論は、孟子の「恒産なくして恒心あるは、士のみよくすとなす。民のごときは、すなわち恒産なければ因りて恒心なし。いやしくも恒心なければ、放辟邪侈（ほうへきじゃし）、なさざるなし、罪に陥るに及んで、しかるのちに従いてこれを刑（罰）するは、民を罔（無）するなり。」（小林勝人訳）という言葉に始まり、しばしば色々な著作に登場した。「贖田」実現の動きもあったが、これが実現することはなかった。上記の動きも結局失敗に終わった。本学の島森教授の解説によると、「恒産」は「決まった生業（なりわい）」、「恒心」は「変わらぬ心」であり、「士」は「学問ある立派な士」、「民」は「一般庶民」である（島森哲男・浅野裕一『孟子・墨子』角川書店、1989）。

孟子のこの下りはいろいろなアナロジーとして引き合いに出されるが、地方の単科教員養成大学に身を置いて、「恒産」を大学財政に、「恒心」をわれわれの精神状態に置き換えると何かが見えてくるように思える。われわれはこの場合、「士」ほど立派ではなく「民」ということになるが、運営費交付金の1パーセント削減、総人件費5パーセント削減、給与の引き下げ、等々は「苛政」に等しく、「士」ではないわれわれ「民」は「放辟邪侈」などをなす「気」は全くないが、ただ前途に希望をなくし、やる気を失い、「恒心」が危うくなるのである。これでは「国計」に従事することもできない。ここでは、孟子が梁の恵王に「民」の願いを無視しない「仁政」を行ってほしい、と諫めたように、われわれもまた「仁政」を願うのである。

新しい年度が始まろうとしている。法人化2期目の開始である。われわれは法人化1期目で実力を使い果たした訳ではないし、われわれのポテンシャルは限りないことを知っている。「仁政」を願いつつ、確かに教員養成という国家政策の一翼を担い続けるつもりでいるのである。

(2010.2.12)